

羽仁もと子の家庭教育に関する一考察 —母親の生き方と子どもの生活を中心に—

馬場 結子

(2014年10月15日受理)

要約

本稿は、羽仁もと子の家庭教育論について考察するものである。彼女の家庭教育論は、まず第一に、家庭のあり方から検討される。たとえば、家事家計の見直しや調査、実践や検討を通して家庭経営の全般が考察される。そして、そこから育児論が展開されるという仕組みである。つまり、家庭生活のなかに育児や教育が位置づけられ、家事家計が整然と行われていれば、自然に子どもの教育が行われるという考えのもとに家庭教育が成立する。子どもの教育の前に、まず家庭を整えること、それが滞りなく進められてはじめて教育が行われることを羽仁もと子は説いたのである。これは、生活を教育の範疇に入れたことによるものであり、また、彼女の考えとして家庭生活のなかに育児や教育が位置づけられたことが理由としてあげられる。そして、羽仁もと子は家庭の中心的存在に母親を据え、家庭を基本にしながら母子関係をもとに育児論を構築したのである。

キーワード 羽仁もと子、家庭教育、生活、母親、子ども

1. はじめに

近年、核家族化が定着したなかで、母親の就労やそれに伴う保育所不足の問題等、子育て支援に関するさまざまな問題が浮上している。かつて専業主婦が多かった時代と比較し、現在では有職者の母親が多いため、子育てに関する課題も多岐にわたっている。女性が結婚して、家庭をつくるなかで、仕事も育児も両立させる、あるいはどちらかの生き方を選択するという自由も認められる昨今において、育児に対する考え方も多様化しつつあるが、そうした動向のなかで、子育ては女性のライフサイクルにおいてどのような位置づけにあるのだろうか。

今から約20年前に、筆者はYWCAで子育て支援に関わった経験がある。そこにはいくつかのプログラムがあったが、筆者は「子ども図書室」で乳幼児から児童を対象に、絵本の読み聞かせや図書の貸し出しを行っていた。当時はまだ、専業主婦の数が有職者の母親よりも辛うじて優勢であり、平日午後の開館時間には相当数の母親と子どもが訪れていた。筆者の目

には、親子で熱心に「子ども図書室」に通ってくる姿が印象的に映り、子どもに良い絵本に触れさせたいという母親の願いが子育てをより豊かなものにするように感じられ、家庭のなかで占める育児の割合は大きいものであると考えられた。

現在、本学のボランティアセンターにおいて、筆者は子育て講座「絵本のワークショップ」を担当している。この講座は、隔月の土曜日午後に、2歳から6歳までの乳幼児と保護者を対象に参加型形式で行われる。内容は、一冊の絵本を読み聞かせた後に、それを題材としたアート遊びを行うというものであり、実施が土曜日ということもあり、専業主婦の母親だけではなく、有職者の母親も参加しやすく、親子でゆっくりと和みながら、ワークショップは進められる。子どもに「絵本を読ませたい」あるいは「アート遊びを楽しませたい」と願う母親の真剣な眼差しが、専業主婦あるいは有職者の母親の区別なく共通に見られ、リピーターの多いことが特徴である。

こうした経験から、筆者は母親という一人の女性が、専業主婦の母親であれ有職者の母親であれ、子育てを通してどのようにライフワークを築いていくのか、また子育てを通してどのように親子関係を形成していくのかを、子育て支援の立場から考えていくことにしている。母親が子育てを通して自分自身の成長に繋げていくためには、どのような子育てを提案すればよいのか、また現代社会のなかでどのように子育てを考えていけばよいのか、筆者はこうした子育て講座を担当しながら母親から寄せられる育児相談にも応じているが、子育てには常に母親の生き方が反映しているように感じられる。

近年、子育て支援の一環として文部科学省はたとえば家庭教育の推進をはかっているが、平成18年教育基本法の改正に伴って、家庭教育および家庭教育支援に関する内容の充実が目指されている。家庭教育がすべての教育の原点にあると位置づけられたのである（平成24年文部科学省生涯学習政策局・男女共同参画学習課家庭教育支援室のデータによる）。つまり、現代の子育て事情のなかで家庭教育の重要性が認識されたことになる。そして、ここ数年来において、有職者の女性が増えたことに伴い、共働きの家庭が専業主婦の家庭よりも増大したことが考慮され、家庭教育を地域社会の連携のなかで捉えていく見方が提案されている。

本稿では、こうした現実を踏まえて一つの打開策として、女性のライフスタイルを母親の生き方と子育てのあり方に焦点を当てながら、家庭教育の意義について考察していくことにする。そこで、そうした先導者として常に日本の女性たちをリードし続けた、羽仁もと子（1873～1957）の家庭教育論を取り上げ、上記のような問題についてさまざまな視点から考えていきたい。羽仁もと子の場合、子育ては家庭を基盤に進められるが、彼女が家庭を一つの基点としてそこから育児論を展開させたところに大きな特徴がある。羽仁もと子の功績は、雑誌『婦人之友』の刊行や全国友の会の結成、自由学園の設立等に見られるように多岐に及ぶものであるが、そこには彼女が常に家庭生活を重視していた姿勢が窺える。

さて、羽仁もと子の研究において優れたものとしては、斎藤道子『羽仁もと子—生涯と思想』をあげることができる¹⁾。論考では、羽仁もと子の幼少期からやがて数多くの業績を残すに至るまでの彼女の歩んだ道筋が確かめられる。これは、縦断的な研究として代表的なもの

して考えられるが、筆者は、とりわけ横断的に子育て支援の立場から羽仁もと子の家庭教育論に焦点を当てたいと考える。先行研究としては、鈴木博雄「羽仁もと子の家庭教育思想の現代的意義—福沢諭吉との対比において—」がある²⁾。これは、福沢も羽仁のように家庭教育を重視していたことが説明され、近代の家庭教育の形成を知る上では特筆すべきものではあるが、しかしながら、そこには羽仁もと子の女性としての視点が見られないため、彼女独特の家庭教育の構造が明らかにはされていない。本論では、家庭は女性の生活の場であり、羽仁もと子ならではの女性の視点を持ちながら、彼女独特の家庭教育論について考察していきたい。また、西村絢子「羽仁もと子の教育論—女子教育観と生活主義教育の系譜について—」も優れた先行研究としてあげられる³⁾。これは、羽仁もと子の女子教育が巖本善治との比較から論述されるが、羽仁もと子の逝去後も続く『婦人之友』の活動等が説明されていないため、彼女の活動の現代的意義が明らかにされていない。本論ではそうした点も踏まえ、羽仁もと子の教育が現在も続く普遍性を「女性」と「子ども」の視点から探求していきたい。たとえば、羽仁もと子夫妻は、万葉学者であり民俗学者でもある折口信夫との対談で「時間・空間をこえた普遍妥当性のある絶対」の必要性について思想的問題と絡めて示唆している⁴⁾。本稿ではそうした点を考慮し、羽仁もと子の家庭教育論において時代を経ても変わらないもの、すなわち普遍性の問題について考えてみたい。それを踏まえて、羽仁もと子独特の家庭生活術をめぐる母親と子どものレッスンについて彼女独自の教育論から考察していきたい。

さて、本稿における資料としては、羽仁もと子の著作集（全21巻）において『家庭教育篇上・下』『教育三十年』等⁵⁾が刊行されている他に、既刊の『子供之友』、現在も刊行されている『婦人之友』等の雑誌、近年刊行されている『かぞくのじかん』がある⁶⁾。また、彼女の娘である羽仁説子『私の受けた家庭教育』も貴重な資料である⁷⁾。これは、幼児教育者の羽仁説子による回想録であるが、こうした資料等を手掛かりにしながら、子育て支援という立場において、母親と子どものあり方に焦点を当て、女性の視点から羽仁もと子の家庭教育論について考察していくことにしたい。

2. 家庭生活における女性の生き方

羽仁もと子は教育活動においてさまざまな優れた業績を残したが、彼女の生きた時代は大正自由教育という名のもとに、多くの教育者が衆知を集めてさまざまな改革を行っていた時期に相応する。たとえば、野口援太郎の成城学園や中村春二の成蹊学園に見られる自由主義学校の設立、小林宗作のリトミックの紹介やトモエ学園の設立、さらに沢柳政太郎の池袋児童の村小学校に見られる児童中心主義の学校の設立等、欧米の進歩主義教育を手本に、旧教育体制から脱却した自由で闊達な新しい教育改革が始まっていた。

そうした動向のなかで、子どもの教育については、たとえば倉橋惣三が生活重視の立場から幼稚園教育の改革を行っていた。倉橋は幼稚園と家庭における子どもの過ごし方の違いに憂慮し、それは生活の軽視から招くものと考え、子どもの生活を基本とした幼児教育のあり方を提唱した。さらに、木下竹次が小学校の学習内容について家庭生活との関係から捉える

ことを提示した。折しも生活綴方運動が展開していた時代である。子どもの日々の生活がテーマになり、子どもの生活を基本にする考えが示されたのである。羽仁もと子の場合も、生活をあらゆることの基礎に考え、「生活しつつ、祈りつつ」のスローガンをモットーにしながら、キリスト教主義に基づいた敬虔な生活に基づいた教育内容を展開した⁸⁾。彼女も倉橋同様に、子どもたちの集まりの場—幼児生活団をつくっているが、それは幼稚園という制度化された教育環境ではなく、週1回の子どもたちの集いであり、家庭との連携から進められたものであった。その集いを通して子どもたちはよい生活習慣をつけるために、多くのことを経験しながら学ぶのである。それは、家庭から分離されたものではなく、とりわけ彼女は、家庭という枠組みから生活を捉え、家庭で役立つものを子どもたちに教え、家庭を基本にした生活改革を実践的に示した。

さて、こうした羽仁もと子がまず着手したのは、日本女性初の新聞記者（報知新聞）としての経験を生かしながら編集した雑誌『家庭之友』（1903年創刊）の発行であった。夫の羽仁吉一と協力して刊行したこの雑誌は、前近代からの「家制度」とは異なり、新しい家庭像を求めるものであった。羽仁夫妻の歩みからすれば、家庭は夫婦で協力して作り上げていくものであり、そこからすべてのことが展開すると考えられる。実際に、二人は、雑誌の発行についてはもと子が執筆を担当し、夫の吉一は編集を担当していた⁹⁾。家庭から始まり、あらゆることを夫婦で協力する体制ができていたのである。家庭を中心に考える基盤作りがこの『家庭之友』によって進められた¹⁰⁾。この雑誌の執筆者には、羽仁もと子の出身校であった明治女学校校長の巖本善治、山脇学園創立者の山脇房子等が名を連ねている¹¹⁾。いずれも先進的な女子教育の発展に尽力した教育者であり、羽仁もと子の家庭像には、当時の気運であった女性の自立という観点が含まれていたと考えられる。そうした証拠に、彼女は『家庭女学講義』（1906年創刊）も発行している¹²⁾。彼女は、明治女学校卒業後に教師になっているため（後に記者となった）、女性にとっての学問の必要性を十分に意識していた。彼女は巖本の刊行した『女学雑誌』の影響も受けていたのである。

さて、この『家庭之友』ならびに『家庭女学講義』は、やがて一つの雑誌『婦人之友』（1908年創刊）に集約されていった¹³⁾。これからの女性のあるべき姿を示すことがこの改題にあったと考えられる。羽仁もと子の生き方から示されるように、それは、家庭があらゆることの基盤であるという意向から専業主婦だけを対象にしたものではなく、家庭経営は仕事の有無に関係しないという理由から有職者の女性も含めたものであった。現に、羽仁もと子は有職者の女性であり、家庭は両者の女性に共通したものであるからである。また、この雑誌はやがて、羽仁吉一によって刊行されていた子どものための雑誌『子供之友』（1914年創刊）¹⁴⁾も含めていくようになった。その結果、女性が子どもについても視野に含めながら家



図1 『子供之友』

庭生活を展開していくことが明瞭に示されたことになる。

雑誌『子供之友』は羽仁もと子の教育思想を中心としながら、多くの児童文学者が名を連ねて作品を発表した。たとえば、北澤楽天や竹久夢二、村山知義、武井武雄、小川未明、西条八十らが、「童心主義」といわれる子どもの情緒的な心意を謳ったお話や物語を発表した。また、児童自由画運動を展開した山本鼎による児童画の選評も行われた。この雑誌では、羽仁もと子によって子どもの生活の心得が手本を示しながら説かれているが、こうした作家たちの登場によって子どもの自由な空想がひろがり、当時の潮流である児童中心主義の立場が明瞭化された。それは、知識の注入主義ではない、子どもの感性をどこまでも自由で豊かに育むことを目的としたものであった。さらに、羽仁もと子夫妻は雑誌『新少女』も刊行しているが、これは『子供之友』と同じスタイルの傾向の雑誌であり、読者の年齢層は『子供之友』よりも少し高めであるが、執筆者には竹久夢二や北澤楽天のほか、与謝野晶子も名を連ねた。この雑誌は子どもの気持ちを情緒的に謳い上げた雑誌として高く評価されよう。

現在も刊行され続けている『婦人之友』においても、子どもについての特集が組まれている。ここに近刊の『婦人之友9』(2014年第108巻第9号)がある。以下に、それをもとにしながら羽仁もと子の築き上げた家庭像を考察することにしたい。たとえばこの号の雑誌のなかで子どもに関する記事は、まず、福島の保育所における震災と原発事故の説明、暮らしをテーマに秋の行楽弁当の紹介、中秋の名月にちなんだうさぎの饅頭の紹介である。さらに、親と子の生活をテーマに絵本「虫と畑と食べ物と」が掲載されている。その他に読み物では、上野動物園についての記事がある。これらを概観すると、こうした記事だけで育児が完了ということではないが、限られた紙面のなかで「今必要なものは何か」という視点で子どもについての特集が組まれている。掲載記事は少ないながらも(全体の7分の1程度。近年刊行された、別雑誌『かぞくのじかん』ではむしろ子どもがより多く取り扱われている。)、読者に伝えたいことを明確に示した意気込みが見られる。



図2 『婦人之友』

さらに注目すべきはそのほかの記事の豊富さであり、特集「暮らしがかわる片づけの習慣」では子育てがひと段落した後の住まい方が実例をもとに説明されている。また、座談会は習慣をテーマに対談されている。さらに羽仁もと子の言葉、戦争、憲法などの社会問題、女性たちの古着を活用した衣服制作の作品紹介がある。また「暮らし」のテーマでは前述した料理のほか、園芸、家計簿、医学では認知症のケア、読み物では上記の絵本以外にはエッセイ、小説や本・映画の紹介がある。また、口絵としては、京都東山の築百年の長屋の照明、ネパールの農業が紹介されている。全般的に見れば、女性が知得すべきこととして、家事(衣食住を中心に)、社会、文学、芸術、園芸、医療等あらゆる分野が示され、先にあげた『家庭女学講義』の系譜に関連しながら、女性が家庭を基盤に多くの事柄に接して生活すべきこ

との心得が示されている。

こうした内容を踏まえて特徴としてあげられることはおよそ次の3点に集約できるであろう。第1点は、『婦人之友』の読者層は幅広い年齢層を対象にしているということであり、具体的に言えば、20代から60代の女性を対象にしているということである。したがって、たとえばポール・ラングランの述べるような生涯教育の構想が彼女のなかに既にあったのではないかということが考えられる。羽仁もと子はこの雑誌を基盤に全国友の会を結成し、その会員の女性たち(20代から90代まで)を中心に生活のための勉強会を実施した。これは現在も続けられ(全国友の会数189、会員は22000人)、女性が一生涯を通じて家庭生活を基盤にあらゆることを学ぶための内容が示されている。また、現在は高齢者向けに雑誌『明日の友』も発行されている¹⁵⁾。つまり、羽仁もと子はいち早く、女性が学校を卒業した後の生涯教育という考えを提示していたのである。第2点は、雑誌『婦人之友』の学びである。上記にあげたように、『婦人之友』で扱う領域は幅広いものである(家事、社会、文学、芸術、宗教、育児、園芸、医療等)。これらの領域はすべて家庭生活との関連性で捉えられ、女性が家庭を基本にしながらこうした多くの分野に精通することが求められる。構想としては、女性(婦人)―家庭―家事、女性(婦人)―家庭―社会、女性(婦人)―家庭―医療というように、読者の女性が家庭を基本にさまざまな分野に関わっていく構想が示される。



図3 家庭を基本にした学びの縮図

第3点は、本稿が家庭教育についての論考のため、ここで育児の分野に焦点を当てれば、育児は他の分野と変わらない同格の位置付けにある。むしろ、『婦人之友』では衣食住を中心とした家事をメインに、育児を含む他分野が同格で並ぶ。これは育児があらゆる領域のなかの一分野であるということ、さらに女性が家事をメインにしながら育児にあたる必要があること、つまり衣食住を中心とした家事が整然と行われてこそはじめて育児ができるという解釈が成り立つのである。たとえば室内が整理整頓されて物が片付けられていれば、子どもにとって危険性のない安全な場所が確保できるということになる。また、栄養のバランスを考えた食事が整えられていれば、子どもにとって健全な食育が行われると考えられる。衣服についても然りである。子どもにとって動きやすく、季節に応じた着回ししやすい服装が考案されると、子どもは室内でも戸外でも活動しやすくなるのである。端的に言えば、育児は家庭生活のなかの一分野であり、女性はまず家事を整然と行うことが前提であって、それが滞るのであれば育児は不完全なものとなるという考えが成り立つ。まず、家庭婦人としてのあり方が育児の前提として問われているのである。それは、専業主婦の女性であれ有職者の女性であれ共通であり、さらに家庭のなかに育児の分野が含まれることで『婦人之友』には母親の視点が示されたことになる。家庭における親と子の生活という視点がこの雑誌には内包されているのである。

以上、家庭における女性の生き方について概観してきた。家庭教育について考察する場合、まず女性が家庭経営をどのように始めるのかということが前提になる。ここからさらに育児の問題について取り上げるため、家庭における女性（母親）と子どものあり方を通して、家庭における子どもの教育について考察していきたい。

3. 子どもの教育について

では、羽仁もと子自身は育児についてどのように考えていたのであろうか。現在、『婦人友友』のほかに季刊誌として『かぞくのじかん』が刊行されているが、これは20代から40代の女性を読者の対象にしているものであり、常に家庭のなかに子どもが登場していることが特徴である。それは、この世代の女性達が家庭において子育ての最中であることが理由としてあげられる。雑誌の傾向としては、『婦人友友』と変わらず、女性が家庭生活を基盤に多くのことを展開していくための工夫が順序立てながら示されている。

たとえば『かぞくのじかん2014秋vol.30』の掲載記事は次の通りである。一日の過ごし方やはじめの家計簿のつけかた、暮らしの工夫、経済的なごはんや食費の管理、収納の仕方や手作り作品、料理やお菓子の作り方、運動、横浜子どもみらいフェスティバルの報告、海外子育て（イタリア）、家族のタイムテーブル、羽仁もと子のことばが読者にわかりやすく掲載されている。構成としては、一日の効率よい過ごし方がまず提案され、そこから起床時間と就寝時間を決め、さらに家事家計に纏わる料理や収納、運動などを読者が順番に考えていく仕組みが提示される。『婦人友友』に比較すれば、この雑誌はそれほど多様な領域に関わっているとはいえないが、家庭生活のあり方を若い女性層に向けてシンプルに提示している。核家族が確立された現在、家庭のことは育児も含めて親世代から子世代の夫婦に直接伝えることは難しくつつあるが、近年刊行されているこの『かぞくのじかん』では、そうした点に配慮しながら羽仁もと子のエッセンスをもとに家庭生活のあり方が親子関係を基軸にわかりやすく伝えられている。

では、羽仁もと子自身は家庭教育についてどのように捉えていたのであろうか。彼女によれば、家庭教育とはよい生活環境を子どものためにつくることであるという。彼女にとって子どものより良き生活が家庭教育のテーマであった。羽仁もと子のスローガン「生活即教育」はそれを端的に表している¹⁶⁾。よい生活環境をつくるための努力が良き教育になるというのである。したがって、彼女の展開する育児論とは子どもの生活に深く関連したものであった。日常の子どもの生活をテーマにすることでより良い育児が行われる。それは、前章ですでに述べたように、大正自由教育という名のもとに倉橋惣三によって実践されたような生活を基本とする教育であり、羽仁もと子もこれと同様に自由主義の教育の立場をとりながら生活教育の重要性を説いた。両者を比較すると、羽仁もと子と倉橋惣三の相違は、倉橋が幼児と生活の関わりから教育論を展開したことに対して、羽仁は家庭を基盤に親と子の関わりから生活教育を進めたことにある。したがって、羽仁の場合は、家庭を基盤とした母子関係から育児論を構築している。彼女は女性（母親）を中心とした家庭のあり方を示してから育児論へ

と展開したのである。

では、羽仁もと子ほどのような育児論を展開したのであろうか。彼女の育児論については基本的には子どもの生活をテーマに次の5点に集約することができる。第1点は自然に即して育てるということであり、「私どもはよく正直に、自然の指示にしたがって、その命ずるままをするならば、子供はたしかに健康に快活に成長すると思います」¹⁷⁾と彼女は述べている。自然の指示とは、子どもが朝になると起きて空腹を満たすために食事をし、日中は思う存分に活動をし、夜になると休みたい故に眠りにつくという、子どもの自然な要求に従うということである。つまり、どのような育児をプログラムするのにはある程度最初から決まっているのであり、それは子どもの身体の状態を見れば明らかであり、家庭教育においては一日のプログラムとして起床から就寝までを滞りなく潤滑に進めていけばよいのである。

第2点は母親のあり方である。羽仁もと子は「母親の人柄がもしも子どもの心服に値すべく十分であったならば、教育の九分通りまでは、すでに成功したといってもよいと思います」¹⁸⁾と述べている。母親は子どもの手本である。母親の人格が育児のなかで重要になるのであり、母子関係から育児論を展開する羽仁にとって、まず母親の態度が育児の根本として問われる。それが家庭教育の出発点となる。前章において家庭が整えられると自然に育児が進められるという彼女の説を示したが、そこには、家庭の中心である母親の生き方が必ずと育児に反映されると考えられよう。

第3点は良い生活習慣を幼児の時につけるということである。一日の過ごし方は子どもの身体に従い自然に決まっていることを説明したが、それが実際に円滑に行われるためには、習慣化することが肝要である。羽仁もと子は「わがままも何もない嬰兒時代に、よい習慣および規律をあたえられた子供は、そうでない子供にくらべて、非常にわがままの少ないものです」¹⁹⁾と述べる。朝起きて顔を洗いたがらない子ども、午睡をしたがらない子ども、間食ばかりで食事をとらない子ども等、子どものわがまは自然な生活の営みを妨げる場合がある。そこで、朝の時間は顔を洗い着替えて食事が終わるまで、昼については食事と午睡、午後から夕方にかけては入浴と食事および就寝において、母親が注意を向けて子どもが自然に規律を守るように整えるのである。それ故、食事の時間には子どもが空腹であるように、午睡の時には自然に子どもが眠くなるように、母親が配慮していなければならないのである。子どもの生活習慣を身に付けることも母親の深い関与が必要である。

第4点は、子どもが理性に従って行動すること、ひいては子どもの意志を強くすることであり、こうした習慣については母親の配慮だけではなく、子ども自身の生き方も問題になるのである。つまり、子どもが怠惰な気持ちを持たないように、怠け心から習慣が乱されないように、子どもの意志を鍛錬させることが必要になる。羽仁もと子によれば「意志は瞬時の間にできるものではなく、その人の長い間のあり方によって成長し定まってゆくものである。端的に言えば教育の力でできてゆくものである」²⁰⁾という。日常生活のなかで子どもは意志を強くする練習を行い、一つ一つの物事に対処していく力をつけることが求められる。子どもには意志力の継続が問われるのであり、日々の積み重ねが重要である。母親はそうしたことに對して日々根気よく努めなければならない。では、どのようにすれば意志は継続させ

られるのであろうか。子どもは飽きやすく、忍耐力には乏しいことは周知のことである。羽仁もと子は「愛のないところにお互いの教育力も感化力も存在しないのである。教育の根本力は相互の愛である」²¹⁾と述べている。つまり、母親の深い愛情に支えられて励まされながら、子どもは意志の力を育てるのであり、母親が子どもを愛するが故に成長を願い、子どもはそれに応答する形で意志を強く持ちながら良き生活習慣を自らのものとするのである。

第5点は、信仰である。羽仁もと子は信仰を家庭教育のもっとも大いなる基礎と捉えていた。彼女は「子供の心を善良にして高潔にしました強くするためには、ぜひともまずこの信仰を子供の心に入れてやらなくてはなりません」²²⁾と説いている。彼女は、青森で過ごした子どもの頃は近所の寺(対泉院)で遊び、明治女学校時代にはキリスト教を知るようになったが、そうした彼女自身の信心深さから子どもに対して宗教教育は重視された。彼女は「何にしても子供は大人よりも神様に近いものであります」²³⁾と述べ、「無邪気な子供はその母親を神にみちびくところの力のあるものである」²⁴⁾と説明する。これは、ドイツの幼児教育者フレーベルと意を同じくするところである。羽仁もと子もフレーベル同様に、育児を母子関係から捉えて、母親(大人)よりも子どもに多大な価値を与え、子どもの教育に携わった。ただし、ロマン主義の教育とは様相が異なり、羽仁もと子は子どもにも小さな罪があることを説いている。すなわち、それは先にのべた子どものわがままに相当するものであり、幼児の性質としてまた赤ん坊の一日においてわがままは生じるのであり、そうした罪の芽を弱らせたり、あるいは摘み取ることが教育として肝要であることを羽仁もと子は力説している。

以上、羽仁もと子の子ども観を中心に家庭教育について概説してきたが、それは特に母子関係から明瞭化されるものであった。彼女は大人と子どもの関わりから教育を捉え、さらにそれを母子関係という枠組みのなかで家庭教育を構築している。そこには、何よりもまず家庭という領域が前提にあり、教育の営みについては母子関係から捉えられた家庭教育に基礎がおかれる。したがって、家庭のなかの母親の役割は重要である。たとえば、彼女の娘である幼児教育者の羽仁説子は、「子どもが、自分自身で感じ、行動したことについて、親が本気で対処するのではなくては幼児教育ではないと思います」²⁵⁾と述べているが、親子関係から子どもの教育を捉える見方をこのように羽仁母娘二代が継承している。子どもの教育の始まりは家庭教育にあり、それは親子関係、とりわけ母子関係に基礎づけられると考えられるだろう。そして、羽仁説子によれば、家庭教育とは単なるしつけではなく、自分自身の独立のための生活教育であるという²⁶⁾。一人の人間が自主独立すること、子どもが一人の人間として自立することができるように、家庭に纏わる諸事を考案することが求められる。子どもが大人になること、そして大人自身の成長のために羽仁もと子は家庭教育の重要性を説いたのである。先に述べた育児論はそれを端的に表している。では、彼女の目指す家庭教育はどのような方向性を目指しているのであろうか。さらに次章で考察していくことにする。

4. 家庭教育のあるべき方向性

羽仁もと子の家庭教育論は、これまで概観してきたように「家庭」と「教育」という二つ

の構造で成り立っている。すなわち彼女は、家庭としてのあり方を追求し、家庭経営の一つに育児や教育があると考え、家庭を基盤に教育が成り立つという見方を示した。そこで、これまで羽仁もと子の家庭教育の内実について明らかにしてきたが、ここでさらに家庭教育の方向性について考えてみたい。

ここで注目すべきは全国友の会の活動である。すでに述べたように、雑誌『婦人之友』の読者によって結成された友の会は全国にある。この会の活動は、家事家計に纏わるさまざまな領域について検討し、それをさらに幅広く実践していく活動である。羽仁もと子は「世の中に本当によい働きをしようと思うのなら、大きい団体をつくりましょう」²⁷⁾と述べているが、友の会の活動はその一端である。では、どのように活動が進められているのであろうか。具体的に紹介すると、それは、各家庭の衣服調べ、食育、生活習慣の見直し等を徹底して友の会の会員で話し合い、実際に調理や制作を通して相互に家事家計を確かめ合い、さらにその活動と学びの成果を展示会等で発表しているというものである。羽仁もと子は「何でもよいことが見つかったら、それがどんどん早くその群れの中に出来、ひろがってゆくのは、健全な美しい社会だと思います」²⁸⁾と述べている。各家庭でよいことが見つければ、それを家庭の中で浸透させるだけではなく、さらに友の会の中で広め、ひいてはその活動を社会に伝えていくという構造が示されるのである。彼女は、「団体には一人一人が必要です。一人一人の誠意とそのあるかぎりの力が必要です」²⁹⁾と説明し、個人と団体という社会構造について取り上げているが、一人一人の誠意に基づいた努力が団体をこのようにより豊かな活動に導いていくのであろう。

こうした活動の背景には当時の社会主義の考えが反映されている。羽仁もと子は夫の羽仁吉一との協力関係のもとであらゆる活動を進めていたが、羽仁吉一が新聞記者時代（報知新聞）から社会主義の立場にあり、彼の社会主義の理論のもとにしながら、もと子は自分の家庭教育論を展開した。つまり、羽仁吉一が社会主義者の理論家であり、もと子はその実践家ということになる。羽仁夫妻はソビエト社会主義における平等主義の理論を活用しながら、多くの活動を世に広めた³⁰⁾。また、もと子が東北出身ということもあり農村における生活合理化運動に携わったが³¹⁾、この夫妻が目指した家庭経営は質実剛健であり、日々質素で儉約に努めるというものであった。そうした生活観を夫妻は多くの人々に伝えたのである。さらに、当時は新教育が展開していた時期に相当し、その先駆となるイギリスではたとえばジョン・ラスキンやウィリアム・モリスに代表されるような社会主義の思想家が活躍していた。新教育は欧米を中心に世界で広まったものであり、それは、たとえばケルシェンシュタイナーが労働のなかに手仕事の要素を見出したように、また先のモリスが手工芸を発展させたように、生活教育をテーマに取り上げれば、それは生活自体を芸術の域にまで高めていくものであった。羽仁夫妻は1932年に世界新教育会議（フランスにて開催）に出席しているが、事実、羽仁もと子は自由学園の卒業生をバウハウスの教師イッテンのもとに送り工芸を学ばせ³²⁾、その成果は雑誌『婦人之友』で紹介されるばかりではなく、自由学園の教育で実践され、さらに友の会の手工芸にも十分に生かされている。換言すれば、家庭教育の中でも生活と芸術が深く関わっているのであり、羽仁夫妻はソビエト社会の平等主義に傾倒していたこ

とから、良きものをすべての人に平等に伝える意向であった。

では、羽仁もと子は家庭教育にどのような方向性を求めたのであろうか。彼女によれば「人間の行く道はいくつもあるものではなく、真理は一つである。それをお互いが屈従でなく反感でなく雷同でなく、めいめいの真実と忠誠を尽くして、手をつなぎ助けあいつつ研究し実行しあってゆくのが、自分自身の教育でもあり、人と人との相互の教育でもある」³³⁾という。家庭経営(家事家計や育児)は閉じられたものではなく、オープンに友の会で話し合うことで見つめ直され、会員相互の協力関係のもとで真理を追究し、より良き家庭づくりを目指して学びが深められ、責任性あるものになっていくのである。また、そうした相互の関わりを深めていくにあたり、羽仁もと子は次のような点について述べている。「現在自分たちのもっている思いや好みには多くの違いがある。その異なるものの上に、すぐに何かをつくって行こうとするのは無理であり、無策である。すべての人間には、その小異よりももっと大きな共通点がある。その共通点をしっかり捉えて、そこから一つになりつつ進んでゆくことは、ことに教育の世界において絶対に大切なことである」³⁴⁾。人間は一人ひとり異なるのであり、志向や考えに違いが生じるのは当然である。しかしながら、時として小異に関心を向ける傾向があり、事態が進展しないという不条理が生じる場合がある。そうした際に心得なければならないことは、そうした小異よりも大いなる共通点があるということであり、それに向けて努力することが求められるのである。では、この共通点とは何であらうか。羽仁もと子は次のように述べている。

何といても人間の生命の一番大きな支柱は真実です。真実というのはつまり愛です。しかしただ一本の柱で建っている家はどこにもないので、真実というその大黒柱を中心にさまざまな知恵と力が入用です。すなわちよい頭脳と熱心な努力とが真実を中心にしてはじめてよいことができるのです。³⁵⁾

人間の生命における真実なること、これが大きな共通点であり、そのことが個人と団体を結びつける要になると考えられるだろう。一人ひとりの思いや考えを限りなく真実に向けて成長させることを願いながら、それを土台にしながら団体をつくること、一人ひとりが真実をもって交わり合いながら、知恵と努力によって社会をより豊かに発展させること、そうした考えが家庭教育を充実したものにするだけでなく、家庭教育を単に一家庭に終わらせない、家庭は社会の連携のなかで支え合うものとして確実に築かれていくのであろう。

5. おわりに

羽仁もと子の家庭教育論について「母親」と「子ども」の概観してきた。彼女の家庭教育論はまず、家庭のあり方から問い直される。家事家計における見直し、調査、検討などを経て、家政全般が考察される。そこから家庭における育児論が展開される。家庭生活のなかに育児や教育が位置づけられ、家事家計が整然と行われていれば自然に子どもの教育が行われ

るという考えのもとに家庭教育が成立する。子どもの教育の前に、まず家庭を整えること、それが進められてはじめて教育が滞りなく行われることを羽仁もと子は説いた。これは、生活を教育の範疇に入れていたからであり、家庭生活のなかに育児や教育が位置づけられたことによるものである。つまり、まず第一に母親の態度が問われること、母親の学びが生活スタイルに変化をもたらし、自ずと育児も変わるということである。羽仁もと子の家庭教育が母子関係から基礎づけられることも十分に理解できるだろう。

また、既に述べたように、彼女によって設立された幼児生活団という子どもたちの学びの場がある。これは、家庭における子どもの生活をより良きものにするためにつくられた幼児のための集まりである。週1回の集まりではじめられた幼児生活団であるが、現在は週5日の活動内容であり、いわゆる幼稚園と同様の内容である。遠足や運動会、クリスマス会などの行事が催され、日常生活では野菜づくりや料理、工作工芸も行われる。そこには、丁寧な生活の積み重ねが実践的に示され、幼児生活団は子どもの生活を日々より良い内容にすることが実証されるのである。子どもは幼児生活団と家庭の両方で一日を過ごす。幼児生活団で学んだことが家庭で生かされ、家庭における子どもの経験が幼児生活団で生かされるように、幼児生活団と家庭は連携している。つまり、子どもの生活がテーマである限り、両者は深く関わっている。子どもが将来一人前の人間として自立して楽しみながら生活できるように、日々の営みが子どもたちの学びのテーマである。

さて、羽仁もと子が考案した幼児生活団が週1回から週5日の活動内容になったことは時代の要請であり、また専業主婦の母親よりも有職者の母親の方が上回るようになり、幼稚園よりも保育園の入園希望者が増えつつあることもいずれも時代の要請である。女性のライフスタイルは変化し、母親の価値観も昔とは異なりさまざまに個性が溢れ、保育のスタイルも多様になった。しかしながら、どのような時代であっても母子関係は基本であり、先述したように家庭教育は普遍的なものである。まず子育てにおいては家庭のあり方を見直しながら、より良い内容に向けて日々の生活を検討することが重要であることをここで改めて強調する次第である。

註

- 1) 齊藤道子『羽仁もと子—生涯と思想』ドメス出版, 1998.
- 2) 鈴木博雄「羽仁もと子の家庭教育思想の現代的意義—福沢諭吉との対比において—」『日本教材文化研究財団研究紀要 (29)』1999, P.68-71.
- 3) 西村絢子「羽仁もと子の教育論—女子教育観と生活主義教育の系譜について—」『教育学研究 40 (3)』1973, P.54-62.
- 4) 池田弥三郎・岡野弘彦・加藤守雄・角川源義編「日本文化の流れ 長谷川如是閑・羽仁吉一・羽仁もと子」『折口信夫対話2日本の詩歌』角川書店, 1976, P.135-155.
- 5) 羽仁もと子著作集全21巻. 『家庭教育篇上・下』10・11巻, 『教育三十年』18巻.
- 6) 羽仁曜子・婦人之友編集部『婦人之友』, 『かぞくのじかん』婦人之友社.
- 7) 羽仁説子『私の受けた家庭教育』婦人之友社, 1963.
- 8) 羽仁もと子『第2巻 思想しつつ生活しつつ上』婦人之友社, 1928.

- 9) 吉屋信子「羽仁もと子夫妻」『私の見た人』みすず書房, 2010, P.203-208.
- 10) 斎藤道子, 前掲書P.45.
- 11) 斎藤道子, 前掲書P.52.
- 12) 斎藤道子, 前掲書P.78.
- 13) 斎藤道子, 前掲書P.79.
- 14) 羽仁吉一編集『子供之友』婦人之友社.
- 15) 羽仁曜子・婦人之友編集部『明日の友』婦人之友社.
- 16) 羽仁もと子『第十一卷 家庭教育篇下』婦人之友社, 1928, P.24-34.
- 17) 羽仁もと子『第十卷 家庭教育篇上』婦人之友社, 1928, P.39.
- 18) 前掲書P.42.
- 19) 前掲書P.94.
- 20) 羽仁もと子『第十八卷 教育三十年』婦人之友社, 1950, P.10-11.
- 21) 前掲書, P.21.
- 22) 羽仁もと子『第十卷 家庭教育篇上』婦人之友社, 1928, P.117.
- 23) 前掲書, P.122.
- 24) 前掲書, P.122.
- 25) 羽仁説子, 前掲書, P.51.
- 26) 前掲書, P.59.
- 27) 羽仁もと子『第十八卷 教育三十年』婦人之友社, P.234.
- 28) 前掲書, P.330.
- 29) 前掲書, P.227.
- 30) 斎藤道子, 前掲書, P.34-35.
- 31) 前掲書, P.213-247.
- 32) バウハウスは戦時下で閉鎖されたが、戦後に再開された。戦時下の物資不足の時期に羽仁もと子の家事家計は役立つものであったが、自由学園は羽仁夫妻が戦争協力をしたことから閉鎖に追い込まれなかった経緯があり、それに対しては批判がある。
斎藤道子, 前掲書, P.309-316.
- 33) 羽仁もと子『第十八卷 教育三十年』婦人之友社, P.338.
- 34) 前掲書, P.330.
- 35) 前掲書, P.257.